

特集 地域文化の振興

巻頭言 8 地域文化振興のために 三善 晃

座談会 10 まちづくりにもみる

地域文化振興

―出席者 佐藤克明／杉村信夫／熊倉純子／諸井 誠／（司会）甲野正道

論文 20 公立文化会館活性化への課題と展望

千葉和廣

エッセイ 24 広島と市民オペラ 原田康夫

事例紹介① 26 人形劇を生かしたまちづくり 長野県飯田市教育委員会

事例紹介② 30 異世代・異文化との交流による

子ども文化の創造を中核として

佐敷町文化のまちづくりがめざすもの 沖縄県佐敷町教育委員会

事例紹介③ 34 近松にロマンを求めて 山口県長門市教育委員会

近松祭 in 長門

解説 38 文化庁の地域文化振興に関する施策

文化庁文化庁地域文化振興課

44 Q & A

48 芸術文化振興基金による地域文化振興活動への助成

日本芸術文化振興会基金部

50 ●千葉県習志野市立秋津小学校を訪ねて

カラー

1 記念館めぐり●ゆかりの地を訪ねて

石川啄木記念館 岩手県

4 この道を行く

東目筋・大口筋白銀坂

表2 誌上展示室

韓国の喪興

表3 文化財紹介

有東木の盆踊

6 私と教育、私とつけ 松村邦洋

58 焦点―文教施策

60 中教審ニュース

63 マンガで見る教育の情報化

64 都道府県発 ●教育・学術・文化・スポーツニュース

66 レッツ トライ 青森県、滋賀県、広島市、福岡県

68 めざせシドニー五輪 国立那須甲子少年自然の家

70 全国子どもプラン カヌー

72 総合的な学習の時間 子ども科学・ものづくり教室

74 大阪教育大学教育学部附属 平野中学校

76 海外教育ニュース

78 ランタナム 大分県久住町学校給食共同調理場

82 インフォメーション

84 鑑賞席

編集後記

まちづくりにみる 地域文化振興

●甲野 本日話題にさせていただくことは地域の文化振興でございます。本日お集まりの皆様は、それぞれ芸術文化あるいは伝統文化など様々な分野で文化活動をなさっております。地域文化振興という観点からお話をさせていただければと思います。

最近、地域の特徴を生かしたまちづくり事業が全国で展開されていますが、実際に携わっている方から、その現状をお聞きたいと思います。

それぞれの地域の特徴を活かして



●佐藤 私は社団法人日本芸能実演家団体協議会で調査研究に携わっており、各地の新しい動き、例えば公立文化施設の

活動など注目すべき文化行政を直接取材しております。その取材を通して日立市との関わりが始まりました。その後、アドバイザーとして様々な文化事業、とりわけオペラのまちづくりに関わっています。一九九〇年一月に駅前再開発でオープンした日立シビックセンターは、音楽ホール、多用途ホール、野外ステージのある大広場、展示スペースや練習場などの施設を兼ね備えた複合施設です。日立市は、コンクールで上位入賞するようなレベルの高いものからお母さんコーラスまで合唱活動が大変盛んです。劇団や室内楽、企業従業員が中心になったオーケストラもある。これらの市民レベルの活動の質を高めたいという気運が高まり、センターを核として人材育成、交流、そして発信という柱を立て、やがて市民の

声をもとにオペラをやることになったんですね。市内のオーケストラとか合唱とか演劇の分野の人たちが共同して、市民をできるだけ広範に巻き込み、地元で人材育成を行うこととなり、外部から芸術監督を招き、今年の一月に新作初演まで来たわけなんです。作品のあらすじは全国に一般公募して、五七本集まった中か

●出席者（敬称略・発音順）

佐藤克明 さとうかつあき 音楽評論家、財団法人日立科学文化振興財団自主事業アドバイザー

杉村信夫すぎむらのぶお 土佐絵金歌舞伎伝承会会長

熊倉純子くまくらすみこ 社団法人企業メセナ協議会プログラム・ディレクター

諸井 誠もろい まこと 作曲家、埼玉芸術文化振興財団理事長・芸術総監督、彩の国さいたま芸術劇場館長

●司会

甲野正道 こうの まさみろ 文化庁文化部地域文化振興課長

ら一本が選ばれ「水の声」という作品になりました。

日立はオペラ団体がないので全国から学ぼうと、全国オペラフォーラムを毎年日立で開くということにいたしました。

また、日立にオペラの情報センターをつくり、ホームページの開設、情報誌の発行を行うなど、全国の情報を集め、発信しています。それから、市民に呼びかけて「市民オペラを育てる会」を設立し、会員は五〇〇人を数えます。活動は、日立市に根づいたオペラの創造を目的として、人材育成のためのオペラ制作講座やオペラのための演技を伴う合唱団の育成です。様々な普及活動やコンサートなどを市内の公民館や学校の体育館などを使って行っています。日立市は過疎地域もありますが、そこにも出向いて、コンサートや子どもたちのブラスバンドと共演して、地域に広げる活動を地域と協力して行っています。オペラはそういうものの頂点ということになったんですね。

●甲野 日立のオペラは、音楽の土台を基礎に積み重ねてきたんですね。それにはいろいろな問題点など、御苦労されたのではありませんか。



●佐藤 そうですね、いろいろ問題点はあります。オペラは市民の声で始まったんですが、一方で市民の中から「この不況に何でオペラだ」という批判も聞かれます。オペラが不況の解決になるわけではないんですけども、皆さんが元氣を出せる。それから子ども問題、あるいは、段々人間関係が希薄になっていく。そういう中で心をつなげる活動としてオペラを位置づけていました。

杉村 町に大きい施設がないので、初演は企業の駐車場を借りて特設舞台でやりましたが、途中で大雨が降り急ぎよテントを張ったり、苦勞の思い出があります。二回目からは農協の倉庫を借りています。それぞれが皆仕事を持っているので、練習も皆が集まるのは何日もない。しかし、一番の悩みは、やはり資金面ですね。平成九年から役場の助成や文化庁の御支援などを受け、大変助かったところです。今後は後援会組織みたいなものを作って、町全体で支えていく形で取り組みたいと思っています。

フランスの時は一部県から補助していただき、旅費は自費でした。ただ、演技が終わって拍手が一〇分位やまず、みんな鳥肌が立つような気持ちで、今までの七年間の苦勞が吹飛びました。やってよかったというかねえ。地元の高知新聞も紙面の一ページ全部に取り上げてくれました。さらに、今年サントリー文化賞をいただきました。町の人が、よう頑張ってるね、応援するから頑張って、という声がいっぱい多くなつて、これを大事にしていけないかん、という意識に変わ

たわけです。最初にやったのは、「二月堂良弁杉」一演目だけでした。役場や農協の職員をかり集めて、歩き方から科白の言い回しから、かなり苦勞しました。この間、他地域で公演したり県の芸術祭にも参加しています。

平成一年の十一月には、フランスのリヨンで開催されましたジャパン・ウィークに参加し、歓待を受けまして、いまだに脳裏から離れないという感じです。

●佐藤 言葉の問題はどうでしたか。

●杉村 事前にフランス語の要訳を渡して、一部掛け合いをフランス語を使い、それが受けまして、距離感もなくなり、うれしかったですね。

●甲野 フランス人は日本の伝統文化に大変興味を持つ人が多いですね。

●杉村 そうですね。ロビーで、「サインしてください」、「握手してください」。サインなんてしたことありませんからね（笑い）。

●甲野 熊倉先生はフランスにも長くいらつしやうと聞いてますけど、今のお話を聞いて何か思うことがありますか。

●熊倉 日本人も異文化好きですけれど、一つあるんじゃないかと私は思ってますけどね。

●甲野 資金面のお話が所々出ておりましたが、諸井先生は埼玉県の芸術文化財団の理事長、芸術総監督、そして彩の国さいたま芸術劇場館長として、文化活動に携わっておられますが、少しお話いただけますか。

●諸井 今、館長の仕事は一部分になってしまつたんですよ。平成一二年四月から広域展開している浦和と与野と熊谷の三つの文化施設を一つの組織にして事業本部を作り、自主事業の制作を行うというふうにしたんですね。芸術総監督は自主事業を総括して、館長は貸し館事業を担当して、理事長は全体の経営を担当しているわけです。この芸術劇場は複合施設で、四つのホールと二つの稽古場を持っています。資料室や展示空間も持ってるんで、いわゆるパフォーミング・アーツ・コンプレックスという形になるんだと思うんですね。ですから、自主事業を、今までは年間およそ二〇〇公演やってきたんですが、今は三つの文化施設全部で二〇〇本弱に減つちやつたんですね、予算が減つてしまつたんで。それでも事業

メセナ活動にみる 地域文化振興



●熊倉 非常に伝わるものがあつたんだと思いませんか。舞台とすぐフラットな関係が、そこでできたんだろなあ、と。消費財としての文化事業ではない形で受け入れられたように感じました。

●甲野 今、二つのまちづくりの状況を御紹介いただきました。一方で伝統を、一方では市民の文化活動のレベルアップをきっかけに始まつたわけですが、オペラの制作は白紙状態で大変だったと思いますが。

●佐藤 はい。走り初めから台本完成が大幅に遅れたため、急ぎ私に台本作成が舞い込んできて、慌てたというエピソードがあります。批評や本を書くのはともかく、台本を書くのは全く初めてでしたから（笑い）。また、オペラは大所帯なので、気持ち一つにまとめることやスケジュール調整が結構大変でした。

それから財団職員の人材育成やまちづくりという複眼のリーダーをどうやって作るかということだと思えますね。それが今、大きな問題です。

●甲野 オペラといえますと多くの方々が開わつていくことで、表面に出ない御苦勞があつたようですね。

本部単独で一五〇本位やつてるわけですから、ほかから比べればすごいということになるんじゃないかな。

●佐藤 今のお話をお伺いしますと芸術監督がお仕事のメインと思われそうですが、実際にはお金の問題とか理事長職が大変なんですね。

●諸井 大変ですね。予算が削られてますからね。今までは楽だったんですけどね。人まで減らせと言われると本当に大変です。

●甲野 資金不足は大きな公立文化施設でも見え隠れしておりますが、資金をどうやって確保するかということに関しては、従来から企業から御協力をいただくというやり方が、国レベルあるいは地方レベルでもいろいろあつたかと思えます。特に地方のいろいろな活動に関して企業のメセナは、どういうような形でそれに関与され、あるいは支援していただいているのかにつきまして、熊倉先生から御紹介いただければと思います。

まちづくりにみる 地域文化振興



●佐藤克明氏

この不況に何でもオペラだという声もある。しかし、オペラは、子どもたちも含めて、人々の心を結び、希薄になる人間関係の回復を担うことができる。それはやがてまちを元気にする知恵や連帯になっていく。

「水の声」初演のゲネプロを地域の希望する中学校の生徒たちに観ていただき好評を得ました。

●甲野 やはり、市民の理解、心のつながりが大切ですね。杉村先生はいかがですか。

●杉村 私の町では軒下に屏風絵を江戸末期から今日まで七月の一四、一五日の須留田八幡宮の夏祭りの時に飾ります。昭和五十一年に商工会青年部が、商店街の活性化のため、絵金祭を始めました。平成五年には、歌舞伎を自分らでやつたらという話があり、すぐに組織ができて、指導者を招き、土佐絵金歌舞伎が始まっ

りつつあるんじゃないかと私は思ってますけどね。

●甲野 資金面のお話が所々出ておりましたが、諸井先生は埼玉県の芸術文化財団の理事長、芸術総監督、そして彩の国さいたま芸術劇場館長として、文化活動に携わっておられますが、少しお話いただけますか。

●熊倉 日本人も異文化好きですけれども、一つあるんじゃないかと私は思ってますけどね。

●甲野 資金面のお話が所々出ておりましたが、諸井先生は埼玉県の芸術文化財団の理事長、芸術総監督、そして彩の国さいたま芸術劇場館長として、文化活動に携わっておられますが、少しお話いただけますか。

●熊倉 日本人も異文化好きですけれども、一つあるんじゃないかと私は思ってますけどね。

非常に伝わるものがあつたんだと思いませんか。舞台とすぐフラットな関係が、そこでできたんだろなあ、と。消費財としての文化事業ではない形で受け入れられたように感じました。

●甲野 今、二つのまちづくりの状況を御紹介いただきました。一方で伝統を、一方では市民の文化活動のレベルアップをきっかけに始まつたわけですが、オペラの制作は白紙状態で大変だったと思いますが。

●佐藤 はい。走り初めから台本完成が大幅に遅れたため、急ぎ私に台本作成が舞い込んできて、慌てたというエピソードがあります。批評や本を書くのはともかく、台本を書くのは全く初めてでしたから（笑い）。また、オペラは大所帯なので、気持ち一つにまとめることやスケジュール調整が結構大変でした。

それから財団職員の人材育成やまちづくりという複眼のリーダーをどうやって作るかということだと思えますね。それが今、大きな問題です。

●甲野 オペラといえますと多くの方々が開わつていくことで、表面に出ない御苦勞があつたようですね。

座談会
まちづくりにみる
地域文化振興

九九〇年二月に設立されました。ちょうど時パブル華やかかりしころで、企業が芸術文化のプレスステージに自社のイメージを重ね合わせる「冠公演」が非常に多かった時代です。不況で状況は一変しましたが、設立以来一〇年間、協議会は日本の文化インフラにおいて企業がどのような役割を果たすべきか、ミクロな視野、マクロな視野の両方から考えてまいりました。企業がメセナをしやすくなるためには、こういった社会的な要件が必要なのかということ調査研究しております。さて、「地域の時代」といわれるなか、各地に文化施設ができ、文化事業も増え



●杉村信夫氏

フランスでの公演は、いまだに脳裏を離れず公演終了後の拍手に鳥肌が立つ気持ちで、これまでのいろいろな苦勞がすべて吹っ飛びました。

てきたわけですが、商業的なもの以外、文化はなかなか黒字になりにくい性質のもので、おっしゃるとおりどこも資金不足で大変な状況です。メセナに熱心な大手企業には社会文化室とか企業文化部といった専任セクションがあるんですが、これは当然本社のなかにあります。支援要請には東京まで出向かなければならない。まず物理的な距離の面で、地域の文化事業は資金集めにハンディがあるわけです。地域の要請を地元の支社などで受けて本社に上げるシステムはまだまだ定着していません。

しかし一方で、全国各地に地域のメセナ組織が次々と誕生しているのも事実です。これは別にわれわれ東京のメセナ協議会が音頭を取ったわけではなく、各地で自発的に設立されたもので、活動も地域ごとにならざるを得ません。いずれも地域の企業が集まってなんらかの形で文化に携わっていくのですが、地域のアーティストをサポートする奨学金を出しているところもあれば、文化施設を支える会を作ったところもあります。またジャズ・フェスティバルなど文化事業を自主プロデュースなさるところも多いで

じやないか。長い目で見ないと評価しやうがないんですね。それは一過性のことではいけないんで、ずっと続けていきたいと考えております。

●甲野 杉村先生はいかがでしょう。

●杉村 商工会の会長という立場で見れば、絵金祭は二日間で約一万人以上来ます。地域文化経済の振興とどういう接点を見つけてやっていったらいいかなあと考えています。例えば空家を利用して絵金館をつくったり、平成一二年から小学生ばかり一〇人位が参加するんですけど、我々のあとに続いていく者を作って、故郷忘れ難し、故郷離れ難しという大人に育てていきたいなあという、これは最後の目標ですね。

●甲野 ありがとうございます。

佐藤、杉村両先生から今後の展開を伺いたいと思います。

●佐藤 日立独自の文化的財産を、全体として活用してどういうまちづくりが考えられるのか。問題提起をしているところなんです。それは誰でも参加できる。それから伝統的文化財やその周辺を視野に入れていく。さらに人材育成という言葉は簡単なんです、簡単に人が出てきた

す。いまでは「全国メセナ・ネットワーク」と称してこうした組織の連絡会ができ、年一回ミーティングを行っています。現在参加しているのは一六の地域メセナ組織です。

●甲野 企業にすんなりと支援していただけるとうれしいのですが、なかなかうまくはいかないものなのですか。

●熊倉 そうですね。メセナに熱心で専任セクションを設けているような企業には全国から支援要請が集中します。そのなかでどの案件を支援するのか、選別するのは非常に難しいのが現実ですが、ひとつの判断基準は「地元から支援があるかどうか」ということです。行政はもちろん、商工会とか商店街とか、ほんの少しづつでも地域のみなさんが既に支援に名乗りをあげていると、大手企業も支援を上乘せしやすいいと思います。もちろん工場があつたりして関係がある地域なら話は別ですが、縁もゆかりもない地域に支援をする場合は、どれだけ地元の人々に支持され、支えられているのかということが重要なわけです。

また先進的なメセナ企業では、単なる支援からパートナーシップを求めるよう

に育つわけではありませんが、絶えず議論をしながら、広い視野を持っていくということですね。

●杉村 これがずっと続けていけるような土台作りということ、いろいろなアプローチをしながら自己資金を作っていくことも大事なことですし、もともととレベルアップして輪を広げていきたいなというのを今考えております。

●甲野 ありがとうございます。どちらの地域におかれまして、今後とも一層発展して活動されることを、私共としても願っております。

諸井先生はいかがでしょう。

●諸井 地元との関連がなくちゃできないですね。面白い事例があるのですが、桶川市の文学館にアマチュアの演劇集団があるんですよ。桶川の教育長が台本書いて演出もやっているんですね。一年に数公演、芸術劇場に招いて支援してるわけですね。桶川でやっているとその地域に限られてしまうけど、うちへ持つて来ると、より広い観客に観てもらえる。

それからいわゆる発信をするんですね。これは県の事業ですが新進音楽家オーディションというのをやっています。合格者

座談会
まちづくりにみる
地域文化振興

に演奏のチャンスを与えるという形で仕事を作ってあげてもらうんですね。うちではその人たちのリサイタル・シリーズを平成一三年からスタートさせます。一三年には三〇人位の人材銀行ができるわけですね。それを順次月に一回位ずつリサイタルで消化していく。そうすると新進音楽家のシリーズが活性化されるわけです。また、高校演劇の埼玉県の大会を毎年うちでやってかなり支援してるわけです。これは他県にはないと思うのですが、ゆるやかな連帯という計画を考えまして、それぞれの県がやはり考え方のまとまりを持ってたほうがいいんじゃないかという



●熊倉純子氏

地域の学校教育と社会教育が大きな自治体になればなるほどうまくかみ合わない。その間を繋ぐための、芸術関係のNPOなどに関心が高まるのではないかと思います。

フランスなどでも小さな非営利団体が仲立ちをすることで劇場に滞在するアーティストが地域の学校でワークショップを行うことができるようになったという事例もあります。もちろん文化施設のスタッフが自主的に普及プログラムを企画運営してもいいんですが、学校に限らず地域のニーズは多種多様だし、企画スタッフの数が少ない施設が多いなか、とても地域普及プログラムまで手が回らないのが現実です。民間のアートマネジメント熱も高まっていますし、いろいろなNPOがさまざまな芸術普及サービスを発案して地域の文化施設に提案し、責任持って実現できるように育ててくれればと期待するわけです。

●諸井 今のお話の学校と施設に関連するんですけど、今度オックスフォード大学の学生の演劇グループを招へいたのですが、新設の県立芸術総合高校の一年生に英語の芝居を観せて、そのあと討論に参加させる形を試みます。イギリス側が三年続けてやらせてくれと言ってきたんですが、三年やると高校生がまさに一年生から三年生になるので、三年間続けて毎年体験できる。こういうことをやっ

うことで、新しく提案しまして埼玉は樺が県木なので「樺の会」というのを作りました。うちの劇場と埼玉会館、熊谷会館、県立博物館、県民活動総合センター、近代美術館、民俗文化センター、さいたま文学館、それから県立芸術総合高校等で構成しており、それらを全部複合し、連合して、新しく何ができるか検討を始めたところです。

●甲野 県全体が一体となって文化に取り組んでいるんですね。

ところで、最近、地域文化振興を行う上で子どもの豊かな心を育むことが求められていますが、学校の内外を問わず子どもへの関わりについて少しお伺いしたいのですが。

地域文化と子どもの
豊かな心の育み

●熊倉 アメリカの電話会社でA T & Tという企業があります。非常に芸術支援に熱心な企業ですが、一〇年ほど前、日本でビジネスを始める前にまず文化支援を展開したいということで、私どもで日本の芸術団体をいくつかご紹介しました。後日、支援を受けた美術館から話をき

いた時に、それが今の一七歳問題にどれほどからまるだろうか。数年前にある高校が来て、オーケストラ・リハーサル室の壁を傷つけていったんですよ。普段体育館で練習してるらしくて体を壁にぶつけて緊張感をほぐすとか、跳び蹴りをして遊ぶとかいうことをやったらいいんですね。しかしジェントルマンと接触したら、少し変わるんじゃないかなと思うんですよね。地域の自分の周辺だけで生活していると非常に甘えが出てきて、つまり一般的じゃない人間ができちゃう可能性がある。そういうことと劇場とか芸術文化財団なんというものとは無関係ではないんじゃないかな、と考え始めたんですね。少しは良い影響が期待できるんじゃないかなと思って、芸術総合高校の校長さんに提案をしたら、非常に喜んでくれて、それが実現することになったんです。美術館でも夏休みに先生方を集めて特別にワークショップのクラスを作るんですね。予算がなくなることでマイナスだけが浮かび上がってくるんじゃないかと、みんながお金を使わずにできることは何だというようなことを考え出すと、だいたい世の中は変わってくるんじゃないか。

いたのですが、厚さ三、四cmもある英語のアプリケーション・フォームによるよく記入し終わったと思ったら、その後にまだ「普及プログラム支援申込」という用紙があつて驚いたというんですね。展覧会に付随して、ぜひ子ども向けあるいは地域向けの普及プログラムもやりなさい、と。しかも普及プログラムがあつたほうが本体の企画への支援も通りやすいというのです。せっかく展覧会を支援するのなら、ぜひもっと地域社会に拡がりを持たせる工夫も、という姿勢が明確で非常に新鮮でした。

しかし例えば学校向けの教育普及プログラムといっても、日本の現実では地域の学校や教育委員会と社会教育施設である文化施設との間には案外高い垣根があるようです。特に自治体の規模が大きくなるほど、悪平等の論理が働いたりして連携プレーが難しいというのが現場でよく聞かれる声です。また互いにやる気はあっても、学校の先生も文化施設のスタッフもものすごく忙しい人たちです。そこで私は、両者をつないで細かいアレンジをするサービス機能をこれらのNPOに期待しています。

そういえば外国の劇団が来た時に、日本のスタッフと役者が感心したのは、あの人たちは休憩時間になると普通の人間になるんですよ。だけど舞台上立つと王様なんです。ところが日本の役者は舞台上立つと普通の人間なだけで(笑い)、休憩時間は王様になる。そういうことは人間教育として間違ってるんじゃないか。何かやはり劇場というのはいろいろな接点がある。杉村さんは商工会の会長をしてらっしゃるわけですね。そして女形やつてらっしゃる。そういう中で子どもたちのことも考えながらやっていくと、演劇を通じての人間教育って考えますよね。

●杉村 そうですね。

●諸井 何かやはり僕は救われるような気がしてるんですね。

●熊倉 メセナというと華やかなイメージがあるんですが、企業の中では社会貢献活動の一部として位置付けられていて、福祉や教育、環境問題などと一緒に文化にも取り組んでいくことが多いんです。そうした流れの中で、今企業がこういう文化支援に興味があるかという、ひとつにはやはり学校とか青少年向けの文化

●杉村 芸術文化享受の機会均等という視点で文化振興も公共事業であるところらえていただき、採算面で民間ビジネスの対象となりにくい音楽や演劇の地方での開催を積極的に行っていたいただきたい。そして地域間交流などにも支援をいただきたいと思います。

●熊倉 これからの文化政策は福祉や教育など他の分野との連携が重要になります。公立文化施設は地域内のネットワーク作り重要な役割を果たすようになるでしょう。しかし、そうした需要が顕在

●佐藤 私も長く子どもと文化の問題を

れからの地域文化振興のあり方や展望、あるいは地方と国の役割、国のすべきことと地方のすべきことなど、先生方が日ごろ念頭におかれておられることや考えていらつしやることを一言ずついただきましたと思います。

●諸井 県単位の地域振興では特に「国際性」に留意すべきでは。中央を通さず、直接海外の都市や町と結びつく事で、地域的な狭い視野から離れて、時には客観的に自分たちの地域文化を見つめ直すことも必要でしょう。私共はシェイクスピア・シリーズを通じて英国と、舞踊ではオランダ、ドイツ、カナダ、イスラエル、中国、台湾、韓国等と既に交流を深めており、音楽では欧米にとどまらず、オーストラリア等との連携関係も考えています。映画は早くも全世界的になってきました。

●諸井 誠氏

事業を実施するとき、予算のマイナスだけが浮かび上がってきてしまうが、そうではなく、いかに予算を使わずにできることは何だということを考えると世の中も変わってくるんじゃないか。



座談会 まちづくりにみる 地域文化振興

考えたり関わったりしてきたんですけども、ある時期から子どもたちの異常な文化、それも殺人事件に至るまでの様々な社会病理的な状況が生まれてきた。それに対して常に文化が何かできないか、ということを考えてきたんですね。文化を通じて心をつなげるようなコミュニケーションづくりをしないと、世の中はどうなっちゃうかという危機感からですね。

●熊倉 そうですね。コミュニケーションの問題ですね。同じ空間の中で身体性がすごく大事なもので、単に科白をしゃべるといっただけじゃなくて、間の取り方ですとか。

●諸井 要するに相手を考える。

●熊倉 自分一人では舞台は成り立たないし、お客さんもある。非常に有効な学習だと思っんですね。だからアーティストにもっとと学校に行つて欲しいと思うん



●甲野正道
地域文化振興課長

●佐藤 子ども問題も含めて、地域コミュニティの再生が至上課題になっている中で、地方分権が進み、自治体の文化行政の役割がますます大きくなつてい

●熊倉 これからの文化政策は福祉や教育など他の分野との連携が重要になります。公立文化施設は地域内のネットワーク作り重要な役割を果たすようになるでしょう。しかし、そうした需要が顕在

これからの 地域文化振興



●甲野 いろいろと貴重なご意見をいただいているところですが、残念ながら時間間も押してまいりましたので、最後にこ

●甲野 ありがとうございます。今日お聞かせいただいたお話につきましては私共は課せられた意見というように、十分今後の施策に反映して、いろいろ考えていきたいと思っています。

●甲野 ありがとうございます。今日お聞かせいただいたお話につきましては私共は課せられた意見というように、十分今後の施策に反映して、いろいろ考えていきたいと思っています。

特集
●
短期大学制度
50周年

●巻頭言

短期大学制度

五〇周年を迎えて

佐久間 彌

●座談会

短期大学制度

五〇周年を迎えて

川並弘昭／島 多慶志／遠藤ふさ子／
館 昭／西阪 昇

●論文

●エッセイ

●事例紹介

県立新潟女子短期大学
ほか

記念館めぐり◆ゆかりの地を訪ねて

笠岡市立竹崎美術館

私と教育、私として

森末 慎二

都道府県発

◆教育・学術・文化・スポーツニュース
北海道・富山県上平村・兵庫県神戸市・岡山県

編集後記

▽今月の特集では、地域における様々な文化振興の現況と、その課題等について紹介しています。
事例紹介をみると、初めは小さなイベントでも年数を経て地域の文化として定着していくことがあるようです。皆さんの周りの地域でも様々な行事が行われていると思います。その中にはいづれ文化として定着するものがあるかも知れません。
▽「地域文化」とまではいかなくても、地域で行われる季節の行事も多くあります。我が家の娘の通う保育園でも先日夏祭りが行われ、園庭を開放して近所の子どもも自由に参加していました。保護者や先生方の手作りの出店や出し物が並び、浴衣や甚平を着た子どもたちで祭りの雰囲気も十分でした。
四季折々の行事は日本の文化とし

てこれからも大切にしていきたいものです。
▽さて、我が家の娘（一か月）は「あと追い」が始まってしまいました。一瞬でも母親の姿が見えないと不安で大泣きしてしまいます。パパが早く帰った日や休日には娘はパパとお風呂に入るのですが、母が顔を引つめたあとに「んぐやー」と大泣き。
近所の方に「虐待か?」と思われるかなない泣き声です。泣かれたパパも泣きたい気分、トイレにすら入れないママも泣きたい気分です。成長の一過程なのでいずれ治まるのを待つばかりです。
▽今年の夏は例年以上に暑い酷暑です。室内外の気温差による冷房病や暑さによる熱中症も増えているとのこと。体調には十分気を付けてください。
（Y・K）

投稿歓迎

「読者からのたより」欄への投稿、「文部時報読者アンケート」を歓迎します。本誌を読んでの感想、御意見等をお寄せください。

●「読者からのたより」投稿規定

①1件につき400字以内 ②住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記（誌上匿名可） ③掲載分には薄謝進呈

※文章を一部手直しさせていただくことがあります。

〒100-0013 東京都千代田区霞が関3-2-2

文部省大臣官房政策課「文部時報」編集部
※電子メールでも受け付けております。

●「文部時報読者アンケート」

文部時報読者アンケートは添付のはがきのほかに電子メールでも受け付けております。

宛先名「jiho@monbu.go.jp」

コンピュータネットワークを利用した文教行政の広報

文部省では、我が国の文教施策等を広く皆様にご紹介するため、インターネットホームページを利用して情報を提供しています。また、子どもホームページ試行版を設け、情報を提供しています。

ホームページアドレス：

<http://www.monbu.go.jp/>（半角入力）

子どもホームページアドレス：

<http://www.monbu.go.jp/kodomojp/index.htm>

MESSC. 61 月刊

文部時報 8月号

第1491号

●著作権所有——文部省◎

●発行所——株式会社 ぎょうせい

本社 〒104-0061 東京都中央区銀座7-4-12

本部 〒167-8088 東京都杉並区荻窪4-30-16

電話 03-5349-6666（営業部）

URL <http://www.gyosei.co.jp>

●印刷所——株式会社行政学会印刷所

平成12年8月10日印刷

平成12年8月10日発行

定価610円（本体581円）（〒84円）

年間購読料7,320円

・ただし、増大号、臨時号の場合は別に代金を申し受けます。
・なお、購読のお申し込みは直接営業所またはよりの書店にてお願いします。

●本誌の掲載のうち、意見にわたる部分については、それぞれ筆者個人の見解であることをお断りいたします。

Printed in Japan 2000 ISSN 0916-9830 ●この刊行物は再生紙を使用しています。